

屋久島の春の風物詩「モジャコ漁」 漁期前にクリアウォーターを散布



屋久島漁業協同組合の羽生隆行組合長（左）と鯨島洋一参事（右）。



屋久島のシンボル「縄文杉」。確認されている屋久杉のほかでも最大級の老木として1個体に名付けられた。

写真協力：(公社)鹿児島県観光連盟



日本一の水揚げを誇る「トビウオ」。屋久島における漁業の顔のひとつ。

屋久島の基幹産業

1993年、日本初の世界自然遺産として登録された屋久島。豊かな自然や縄文杉を求め、年間で約20万人の観光客が訪れる。

島民は約1万2,000人。島ではボンカンヤタンカンなどの果物の栽培を中心とした農業が盛んだが、漁業も基幹産業のひとつとなっている。島の漁業者をまとめているのが屋久島漁業協同組合だ。2004年に上屋久漁協と屋久町漁協が合併し、1島1漁協となった。名物「首折れサバ」や日本一の水揚げ量を誇る「トビウオ」などが島の顔であり、そのほかにもメダイやハマダイ、ムツ、キンメ、アオダイなどの多種多様な魚種が水揚げされる。屋久島漁協組合長の羽生隆行さんは、「漁場の近さと魚種の豊富さ、高鮮度が強み」とその魅力を説明する。

屋久島漁協の組合員数は170人。直近5年間の平均値では、水揚げ量が422t、水揚げ高は3億5,000万円

だった。トビウオロープ曳き網やコマサバの一本釣り、メダイやハマダイなどの瀬物一本釣り漁業が中心となり島の経済を支えてきたが、近年では、これら主力魚種の漁獲量が減少傾向にあるという。トビウオロープ曳き網の操業者を見ると、盛期に15統（2隻で1カ統）あったものが現在では6統と半分以下に減少してしまっている。昨今の温暖化や燃油高、魚価安、担い手の高齢化なども影響し、島の水産業は新たな局面を迎えようとしている。

新たな柱「モジャコ漁」

新たな漁業の柱となっているのがモジャコ漁である。モジャコとは、我が国の養殖業で生産量1位を誇るブリの稚魚。3～5月頃に流れ藻に付いて訪れる春の風物詩だ。

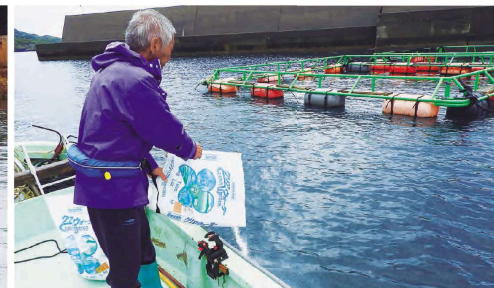
モジャコ漁は知事許可漁業であり、採捕を行う県は操業区域や漁業時期、船舶数の制限を定め、採捕計画尾数を取り決める。鹿児島県の今期の採捕計画尾数は795万7,000尾で、前期より12万8,000尾少ない。今期は3月9日に漁を解禁し、4月17日に充足率93%で終漁した。前々期のモジャコ不漁は記憶に新しいが、その時は計画尾数686万2,000尾に対し充足率45%と大幅に下回り、ブリ養殖業界に大きな影響を及ぼした。

屋久島はモジャコの好漁場のひとつであり、県の契約採捕量の約2割を占める。現在、島では23隻が操業しており、3～4月是一本釣りの一部がモジャコ漁に動き出す。

モジャコはすくい網で採捕するが、網にはアジやマダイ、カンパチなどの稚魚も混在している。漁業者は船上で器用にモジャコを選別し、採捕されたモジャコは、鹿児島県や熊本県のブリ養殖業者に販売する。販売単価は漁協と生産者による話し合いで決定する



「クリアウォーター」(宇部マテリアルズ㈱)散布の様子。船外機を装着した小型船に漁業者が乗り込み作業を行う。2mmと5mmサイズの2タイプをラインナップしているが、屋久島漁協では5mmサイズを用いている。



が、おむね1万2,000～5,000円/kgという。短い漁期ではあるが、現在ではトビウオ漁と瀬物一本釣り漁と同等の水揚げ高を記録しており、短期間で高収入を得られる漁法として屋久島の水産業において重要な役割を果たしている。

モジャコを買い付けた養殖業者は、屋久島漁協から無償で漁場を借りて生管を設置し、モジャコ基地として屋久島で短期養殖を行う。給餌、サイズ選別などを行い、1～2カ月生育させた後、活漁船などをチャーターし、各々の生産現場に運び出すという流れだ。

モジャコ漁の前に クリアウォーターを散布

モジャコ漁は約35年続くものだが、約10年前に島のモジャコ基地でべこ病が発生した。対応策を探していたところ、海水由来の水酸化マグネシウムを主成分とした環境改善剤「クリアウォーター」(宇部マテリアルズ㈱)に辿り着いたという。クリアウォーターは、底質を弱アルカリ性(pH8.0程度)に保ち、硫化水素による底生生物の減少抑制、自然浄化の促進効果を持つ環境改善剤。難溶性で徐々に溶出するため、飼育魚に負荷をかけずに底質改善を行うことができる。このような効果を期待し、屋久島漁協ではべこ病が発生した翌年より導入を開始。町の補助金を活用して現在も散布を続けている。

屋久島漁協がクリアウォーターを散布するのはモジャコ漁開始前の2月末～3月上旬。モジャコの蓄養を行っている栗生、志戸子、一湊(上屋久)の3カ所で導入している。最も広い栗生

(3万3,700m²)で1.8t(90袋)、志戸子(1万4,200m²)および上屋久(1万5,450m²)で各0.9t(45袋)ずつ配分し、蓄養生管を設置している湾全体に船上から散布する。

「クリアウォーター導入後は、べこ病をはじめとした疾病が減少した実感がある」と羽生さん。さらに、「モジャコの疾病は、底質(環境)由来なのか、種苗由来なのかは分からない。だからこそ、積極的に環境改善に取り組まなければならない。今後は、底質の見える化にも取り組みたい」と散布を継続している理由を話している。また、同漁協参事の鯨島洋一さんは、「散布箇所がきれいになっていると評価する生産者の声を聞く」と話す。

モジャコは日本の養殖業で必要不可欠。そのため、モジャコ産地では細心の注意を払って蓄養を行わなければならない。魚病の発生は風評被害を生む。羽生さんは、「クリアウォーターの定期的な散布は環境配慮への担保となる。毎年モジャコを買い付けている業者も安心して買ってきているのではないかと説明する。

屋久島の水産業のみらい

屋久島漁協では1ターン漁業者を年に1～2人受け入れている。世代交代



栗生におけるクリアウォーターの散布箇所。約3万3,700m²の湾に1.8t(90袋)を船上から散布する。栗生以外にも、志戸子と上屋久のモジャコ基地に導入されている。



モジャコへの飼料給餌の様子。手書きで丁寧に成長を見守る。

を迎え若手漁業者も見られるようになってきた。これらの若手漁業者を中心に、観光客の多さを活かした「ブルーツーリズム」に取り組みたいという声もあるという。

環境改善や資源保護、放流などの持続可能な漁業の土台作りをしつつ、世界遺産の利を活かした水産振興の取り組みが拡大している。